

結 語

(表現活動にみる日英のちがい)

日本の学生たちは、一つの運動の型を与えられ、その運動をくりかえし練習することは、割合素直に受け入れ、抵抗を感じないようである。しかし自由な創造的活動になると、たちまち心身ともに委縮してしまい、何をどうやったらいいものかわからないという状態におちいる。そして、自分自身の考えで、自発的・独創的なアイデアで、何かじっくり創ろうとするのではなく、他人の様子が気になり、他人がどう動くかを、チラチラと眺めている。その結果は、ほぼ他人と同じようなものを創造することになる。

他人と同じ結果になることを、極度に嫌うイギリスの学生たちと比較すると、これは大きな違いである。かれらは、つねに“What, How, Where”という観点から動きをとらえ、“How many different ways?”とか“What can the body do?”という思考を働かせるように習慣づけられている。かれらは、一つの与えられた課題(空間・時間・力の要素)から、驚ろくほど豊かな動きを導き出し、そのアイデアも、それぞれおもしろく、感心させられる場面が多かった。

個性を明確に表わすところが常識(習慣)になっている国と、できるだけ個性を表わさない方が生きやすい国とでは、これほどまでに表現活動に違いが生まれることを、あらためて思い知らされた。

(創造性の芽をつむもの)

しかし、この差は国民性や習慣の違いだけから生まれたのだろうか。わが国の学校教育(体育も含めて)において、約15年の義務教育の間に、すっかり個性の芽はつまれ、しぼんでしまうのではないだろうか。

体育の場においても、与えられた運動の型をまじめに練習することが、技術の向上にもつながる、体育学習の理想的な姿であるとされてきたのだから、それは決して学生たちの責任ではなく、むしろ責任は、教育する側にあったと考えるべきであろう。

機械文明の発達にともない、人間らしい動きの場が失われ、動きの量も質も、極端に偏った生活に、われわれは気づかないうちに、そんな世界へ強制的に押し込められている。

一方、高度に進歩した社会(人工的)というものは、全ての人間が、同じ規格の方向(理想)へ進むことを期待しているようにみえる。

しかし、自然な人間の姿は、本来決して同じではなかったはずであるし、個性があってこそ、人間なのだと思う。

学習の場においては、学習者が問題点をみつけられるように、そして、問題解決まで導くのが教師の役目である。ワクにはまった、ワクのなかでしか、ものを考えられない人間を作らないためにも、教師は、教育内容に対する認識をあらためなければならぬだろう。このままでは、個性を失ったまま、どこへ人間はながれてしまうか、おそろしい思いがする。

（動きと人間性）

ジャズ・ダンスのリハーサルを日本のある舞台で見ている時のことである。

指導者は、しきりに、「笑って」、「笑って」という指示を踊手におくっていた。そのうちに、「歯をみせろ！」と叫んだのである。

なぜ、ジャズ・ダンスは歯をみせて、笑ったような顔をして踊らねばならないのか。

なぜ、強制された笑顔で踊らなければならないのか。

動きというものは、さまざまな人間の意志・ところを伴って生まれるものであり、運動だけが人間から遊離して存在するものではないと私は考える。

ジャズ・ダンスといえども、笑ってばかりいられない動きの性質もあるはずである。

運動教育の概念にもとづく、身体表現運動（ダンス・体操など）の特徴は、あらゆる動きが、意図されたものとなり、コントロールされたものになる、ということである。つまり、心身の緊張を取り除いたなかで、空間・時間・力の要素の使いわけによって、身体のコントロールがうまくできるようになり、さらに、姿勢や心身の機能が改良され、バランスのとれた人間の活動が可能になることを目指している。

（ダンス・セラピーと動きのコミュニケーション）

このことは、現在、ダンス・セラピー、または、プレイ・セラピーの概念に結びつき、心身障害者の治療法として、世界中の人に迎えられ、成果をあげていることで、実証されているといえるだろう。

ラバン・センターの授業には、特殊教育（Special Education）という講義（実技を伴う）があり、これには、一般社会人の参加（受講）も認められている。その実技を受講してみて、それが、本研究で私の提案したテーマ「動きのコミュニケーション」の発想そのものであることに気がついた。

つまり、その運動処方は、治療を受ける人に対する、身体と身体のふれあいであり、動きを感じさせ、それにこたえる（反応）ことを通じての相互のコミュニケーションであり、自分自身のからだか、どう動いているか、についての感じ、それを表わすことなのである。

それは、あくまでも心と心の交流に支えられながら、やさしく、つつみこむような形で、ゆっくりとゆする、さする、はずませる、支えあう、ころがる、まわるなど、声をやさしくかけなが

ら展開する一連の動きであった。それは健丈者の私たちでさえ、うっとりとしてしまうほど、心よい気分させてくれる動きである。

(創造的な動きをさらに発展させるために)

ラバンの研究成果も、時代がたつにつれて、その目的とした精神が忘れられ、研究のための研究が進行して、分析データばかりが増え、それを統合する能力を失ってしまう危険性を感じる。

運動はまず、人体の内部にあることを、いくら強調しても、強調しすぎることはないだろう。運動が、そこから発するものでないならば、それは単なる機械的な運動にすぎず、不毛の意味のない動揺に墮してしまう。

生きること——それは、何らかの意味で楽しさの探究である。

自分自身をよりよく理解すると同時に、他者をよりよく理解することによって、よりよい人間の発達・進歩も可能となる。それが、生きることの楽しさにつながるものと思う。

「運動教育」という用語は、広い意味に使われ、必ずしもラバンの理念とは関係のないものも多い。「人間の運動」についての研究は、あらゆる角度から行われており、それぞれに研究としては興味をもって受けとめることができる。しかし、人間が生きている、という実態を無視した研究については、疑問に思うことと同時に、腹だたしさを覚える。

現代人は、とかく複雑で、めんどろなことに對しては、その問題点から目をそらし、安易な方向へとながれる傾向をもっているようにみえる。

それは、それなりに時代の要請として、受けとめることもできるだろう。しかし、安易に、その時々のがれに乗るだけでは、学生の興味をひくための、新しい、おもしろい運動を求めて、さまよい続けなければならなくなる。そのような教師は、ある流派のテクニックを仕入れては、それを、そのまま伝えるだけの、単なる仲つぎ者でしかない。それらのテクニックを、自分の教育(体育)に直接役立つ形に、あらためてプログラムを構成できるだけの能力を、教師自らがまず身につける努力が、まさに必要とされているのである。

芸術というものは、日常生活のなかから、その本質をとり出すものである。

——ピノ・エ・マト——

ラバンは、人間の日常生活のなかから、人間の運動の本質をとらえ、これらの要素を分析し、再構成することによって、運動教育に貢献したのである。